

第十六章 思わざる転換

政権四度目の正月を迎えた昭和三十九年の初め、池田首相の周辺に拭い切れない疲労感がただよっていた。政権の重みが、一種のひび割れ状態を作りだしていたのである。

まず、前尾幹事長が党内のゴタゴタの処理のためすっかり健康を害した。前尾は、京都府の出身で、大蔵省では池田の四年後輩に当たり、池田と同じように税務畑を歩いた。若い頃、やはり池田と同じく大病にかかり、長期休職して、和歌山税務署長をつとめたが、この時期、大阪玉造税務署長をしていた池田と親しくなった。池田の剛、前尾の柔という人格的対照がかえって友情の基礎になったのかもしれない。幹事長としては党内の信望を集め、政権の大黒柱の役を果たしていたが、病院から党に通って執務するという状態となった。大調整役である前尾が倒れたことは、とかくもめごとの多い党や派閥内部のきしみが放置される結果を招来した。

次に、あれほど緊密だった池田と大平の間に隙間風が吹いた。大平は、官房長官時代とはちがって、外相という職務柄、公務に追われ、どうしても官邸や信濃町に足が遠のき、池田、大平間の意思の疎通が欠けがちになった。若手で急速に地位を上げてきた大平に対してはそれまでも嫉妬や羨望があったが、これが不満として顕在化してくる。また、昭和三十五年と三十八年の総選挙で、佐々木義武や伊東正義など大平の古く

からの友人が政界に登場してきたので、彼らが大平の下に派内のグループとして一つの勢力を形成するようにも見られるようになった。

そのうちに、池田の耳に、大平が池田に対して謀叛を起こそうとしているという風評が入る。噂のものは、大平が宏池会の若手議員に若干の活動資金を渡したことで、それが歪曲されて池田に伝えられたのである。

池田は大平を呼んで、「言いたくないから黙っていたが、お前は新しい派閥をつくるそうじゃないか」と糾問した。

大平は、「そんなことを考えているわけではありません。小遣いをくれというから、あなたにかわって手当てをただけですよ。これまでもそうしてきたじゃないですか。いちいちあなたの裁量を仰がなくてもいいではないですか」と言った。

池田は、「それがいかん、それがいかん」と激怒し、大平は一時、池田邸に出入りできなくなった。

この背景には、政権二期目の任期が余すところ半年となつていながらもかかわらず、その後はどう対処するかの大方針が池田を含む宏池会首脳間に明確になつていなかったことがあつた。

池田首相は、これまで自分が推進してきた高度成長政策に確固たる自信を深めると同時に、その間に次第に露わになつてきた成長に伴う歪みを正しつつ教育の充実を中心とした「人づくり政策」を実施し、それによつて池田政治を完成しようという考えを持つにいたつていた。これに対して大平は、池田政権実現のさいに佐藤から協力を得たという関係もあり、池田がむやみに突っ走ろうとすることには強い懸念を覚えていた。彼は当時、しきりに周辺のものに、「総理は強気一点ばりだが、困つたものだ」ともらした。

大平は、外相という立場から、大磯の吉田元首相と接触する機会が多く、吉田が、池田が二期つとめたあとは佐藤と考えていたことをよく知つていた。池田は池田で、吉田のこの考えを察知し、箱根への行き帰りには必ず立ち寄つていた大磯から、足を遠ざけた。吉田の介入を避けるという姿勢である。他方、佐藤のラ

イバルの河野は、佐藤を牽制する意味で、池田に接近し、三選には協力する姿勢を示した。

五月十八日には佐藤が箱根で静養中の池田に話し合いを申し込むが、池田はこれを拒否し、通常国会終了直後の佐藤、藤山両者の辞表提出で、夏の臨時党大会（七月十日）における総裁公選で池田・佐藤の衝突は決定的となった。

池田が「何としても俺はやる。一発で（勝負を）決めてやる」と決意を表明したあと、大平は親しい記者に「ボクは（三選に）賛成じゃないのだけれど、ご本人がやるかといっている以上、やらなければならぬ。しかし、高い切符だよな」と嘆いた。それでも大平は、「ご本人がやるという以上」ということで、大詰めの段階では財界工作などに動き出した。だが、彼はもはや五年前のような主力部隊の中心的存在ではなかった。

総裁公選は決まったが、池田支持陣営は、河野、三木、川島、旧大野などの党人派であった。池田は奇しくもかつての政敵を味方にして、政権誕生の際最大の味方であった佐藤と対決することとなった。表面上の数では池田が優勢であったが、池田支持の各派の中には、密かに対立候補の佐藤を支持するいわゆる「忍者部隊」もいた。

池田は「一発で決める」つまり、一回目の投票で過半数を二十数票上回って勝つ、と強気だった。対抗する佐藤陣営では、池田の過半数得票を阻止し、決戦では「十票は勝てる」と読み、戦いは、一本釣りの乱戦に持ちこまれた。公選の結果は、投票総数四百七十八（うち無効三票）、池田勇人二百四十二票、佐藤栄作百六十票、藤山愛一郎七十二票、灘尾弘吉一票で、池田票は対抗出馬の佐藤票と藤山票を合わせたものをわずかに十票上回っただけであり、過半数を超えることわずかに四票にすぎなかった。池田は「あぶなかったなあ」とつぶやき、もはや自分の時代が終わりつつあることを悟ったが、池田支持の長老松村謙三は、「一輪咲いても花は花」と池田をなぐさめた。

三選された池田総裁はただちに改造人事に着手したが、敵味方に分かれて闘った激しい総裁公選のあとだけに、構想はなかなかまとまらなかった。

この改造人事で中心的な役割を果たしたのは、前尾である。彼は健康上の理由から辞意を表明したが、池田と協議して、三選の時に力を借りた河野一郎ら党人派を優遇しすぎて、半数近い佐藤陣営を反主流に追いやるべきではないと判断し、河野と佐藤のバランスの上に政権の安定を求めようとした。そのため、閣内では佐藤派を、党においては党人派を優先する方針を立て、後任に「党近代化・派閥解消に関する答申」を提出していた三木政調会長を推した。池田首相としては、「自分はこれから二年間総裁をつとめる。三木には一年だけやらせればよい」という考えもあり、前尾の進言に従った。大平は、池田内閣の功労者として幹事長のポストを期待していた。池田政権の幹事長ははじめ益谷秀次、次いで前尾といずれも池田派内の起用だったからである。しかし、大平の期待はかなえられなかった。

結局、党関係は、川島副総裁、三木幹事長、中村（梅吉）総務会長、周東（英雄）政調会長が決まった。閣僚については、河野建設相を副総理格のオリンピック担当国務大臣とし、田中蔵相と赤城農相を留めたのみで、閣僚はすべて更迭された。三年にわたって幹事長をつとめた前尾は、蔵相として入閣することが確定的と見られていたが、ギリギリの段階でこれを固辞し、田中蔵相の留任が決まったのである。佐藤派からは、この田中とともに、愛知揆一が文相に起用された。佐藤派との関係修復の証しである。またこのとき、鈴木善幸筆頭副幹事長が官房長官に抜擢された。旧秘書官グループの大平外相、宮沢経済企画庁長官、黒金官房長官はいずれも閣外に出た。幹事長の椅子を逸した大平は、筆頭副幹事長として三木幹事長を補佐することになった。

大平は記者会見で筆頭副幹事長就任のさいの抱負を聞かれたのに対し、「はじめての党務でひとしお気持ち新たにしている。党務は行政とは異なり可能性を求めることで、まさにそれ自体が芸術だ」と述べた。大

蔵省の大先輩である賀屋興宣（元蔵相）からは、「君はえらい。よく（このポストを）静かに受け入れ、不満もいわずにつとめているね」とほめられた。

だが、ここで大平が幹事長のポストを逸したことは、その後の彼の政治生活の動向を大きく左右し、大平に、長くつらい道を歩ませることとなった。政界出馬以来、上昇気流に乗ってきた大平のコースは、冬の時代に入ったのである。

こうした大平の不運に追いかぶせるように見舞ったのが、長男正樹の悲惨な死であった。池田の総裁三選後間もない八月六日のことである。

正樹は昭和十三年二月六日、当時、横浜税務署長であった大平の長男として横浜の磯子区で生まれた。昭和三十五年には慶応義塾大学を卒業、神崎製紙に入社した。大平は正樹を神崎製紙に二年間勤務させたのち、「わがままをいって引き取らせてもらった」。大平としては、いずれ正樹を政治の道に進ませようと考えており、サラリーマン生活の「深み」にはまらないうちに会社勤めを辞めさせて、自らの身辺で「修養」させたかったようである。

正樹は、三十七年七月から四十力国を回るといふ外国旅行計画を立て、まずハワイへ出発し、それから約二カ月間、北米、南米を旅した。同年九月の国連総会に大平外相が出席したさい、正樹はニューヨークで父親と会い、その私的随員として欧州各国を回った後、アムステルダムで父と別れて旅を続けた。ところがオーストリアのウィーンを訪れた頃、正樹は歩行に困難を感じるようになった。これが病のはじまりである。

帰国後の翌三十八年春、坂出市の親類森田家に泊った時、眼科医である森田夫人が眼球に原因不明の出血を発見したので、正樹は東大病院に入院した。医師の診断はペーチェット病という難病だということであった。注射、投薬、指圧と手を尽くしての治療が行われたが、間もなく右眼が失明、手足の神経も順次冒されて行った。

時のたつにつれて、病魔は容赦なく正樹のからだをいためつけた。昭和三十九年夏も盛りの八月六日夕刻、正樹はベッドの傍らにいた弟の明に向かって、「旅に出るから靴の用意をしてくれ」という言葉をかけたのを最後に、二十六歳の生涯を閉じた。日ごろ沈着、冷静をもって知られ、取り乱したことの無い大平も、落涙をかくせず、池田首相、前尾前幹事長らが相ついで弔問に訪れると、「ありがとうございます」とただ嗚咽するばかりであった。

正樹は多磨霊園に葬られた。パウロ・ミキという殉教死した少年の名をクリスチャン・ネームにしていたことから、墓碑は、大平が「パウロ・ミキ大平正樹」としたため、「父であり友であった大平正芳」とサインした。

長男を失った悲しみの涙を拭うひまもなく、大平を襲ったのが池田首相の発病である。池田自身が声の囁れるのを感じたのは、前年昭和三十八年秋の総選挙の途中からであった。もともとガラガラ声の持主だったから、遊説で声をからしても、本人も周辺も格別気にはせず、ウガイと塗り薬でこまかしていたが、咽喉の痛みはいつになっても消えない。三選後のある日、秘書官たちとの会食のあと出たカンテンを食べながら池田は、「これは咽喉をつるりとすべって気持ちがいい」と言った。「これはおかしい」と感じた人々のすすめで、精密検査が行われることになった。

東大耳鼻咽喉科の佐藤教授、がんセンターの比企総長、慈恵大の佐藤教授の意見はただちに一致した。まぎれもない喉頭ガンの症状である。たまたま大平夫人の親戚の主治医で以前から大平と面識があった比企は、その夜、大平邸に電話をかけてきた。

「どうもガンのようです。なるべく早く早く入院して治療してもらわなければなりません」。平素沈着な大平副幹事長も棒でたたかれたような衝撃に襲われたが、本人、家族はもちろん、世間に言っわけにはいかない。

取りあえず前尾と相談の上、大平は池田首相に対して「このままでは咽喉の軟骨が腐蝕するおそれがあるので、放射線治療が必要です。その設備が東大病院にはないから、がんセンターに入っていたただかなくてはならない」と進言した。池田は九月七日ホテルオークラにおけるIMF総会の演説をすませ、九日夜、入院した。

大平はその時の心境をこう綴っている。

「これはえらいことになった、というのが、私ども側近の偽らない感懐であった。そして、その瞬間、われわれはお互いに言葉には出さなかったけれども、政権の閉幕という大きい課題を意識していたのである。池田さんの心中は窺知するよしもなかったけれども、表面は極めて平静で快く入院にも応じてくれた」。

この時から、池田周辺では、人には知られない苦勞がはじまった。

前尾や大平が最も心を痛めたのは、首相の入院と病状を世間にどう説明するかであった。ガンであることを明らかにすれば新聞に出るし、新聞に出れば本人が知る。政局は大きく動揺し、折から始まるうとしている東京オリンピックに暗いカゲを投げかけることになるだろう。そこで、前尾と大平は密かにがんセンターの比企総長、久留院長と会い、「ガンであることは絶対に秘密にしてウソを言ってもらいたい。それは医師の良心に反するであろうが、他日、必ず国民にお詫びをするから」と要請した。こうして九月二十五日、首相の病状は『前ガン状態』であるという発表が行われたのである。

前ガン状態　ガンではないが、ガンに移行するおそれのあるもの　という発表は、極めて微妙なものだったが、党内には比較的穏やかに受けとられた。政変にはつながるまいという見通しのためである。しかし、『政権の閉幕』を意識した大平副幹事長らの水面下の動きは、軽井沢で静養中の三本幹事長のもとへ電話をかけて帰京を求めするなど、にわかに慌ただしさを加えた。

放射線治療が進んで、痛みは和らぎ、池田首相は毎日をもてあましておられる様子だったが、病状は決して好転したわけではなかった。ただ、十月十日からのオリンピックを控え、世間の関心がそちらに集中していたのが幸いと言え言えた。しかし、大平は、世間が首相の進退に関心を向けてくることを想定していた。

「事態は一見、平静に推移するように見えた。……しかし、現職の総理が入院加療中であるという厳たる事實は隠れもない現実であった。総理が現に担われておる内外にわたる重い責任は、逃れることはできなかった。従って、世間の同情と寛容にもおのずから限度があるはずである。われわれ側近の焦慮は、環境の平静に反比例して日増しに増高してゆくのみであった。大きい決断が要請されていたのだ」。

自分がガンであることに気付いていない総理大臣に退陣を求める手順ほどむずかしいものはない。前尾、大平の二人は知恵をしぼって、オリンピック終了の翌日の日曜日、十月二十五日に退陣を表明する段取りを決めた。したがって、それ以前の十月十六日から二十日ごろまでの間に、本人に辞任の決意を固めてもらわなければならない。

十月十日のオリンピック開会式に池田首相は満枝夫人とともに出席したが、それから数日後、比企総長から十一月の臨時国会はもちろん、翌年の通常国会も出席は無理で、オリンピック直後にお辞めになつては、という勧告が行われた。

池田は「死ぬ気でやったら辞めなくてもいいのではないか」と言つたが、総長が「医師としてそんなことはおすすめでできない」と答えると、池田は「一体、誰がこの話を仕組んだのだ」とたずねた。総長が「前尾さんと大平さんです。他の人は何も知らされていないようです」と言つと、「そうか、あの二人ならまかせることにしよう」とあっさり決断し、十月二十日に退陣の覚悟を固めた。

この頃のことであろう、大平副幹事長がまとめたメモが遺されている。退陣表明の二十五日と二十六日の段取りを記したくんだり、傍線が入ったり、印、×印があつたりして、あわただしい当時の雰囲気を感じ

ているが、二十五日に発表される予定の決意表明の文案の方は、五項目にわたって大平の筆蹟できっちりまとめられている。

まず段取りについては、

「十月二十五日 病状総合診断発表。川島、三木、河野、鈴木招致（決意表明、副総理

おくかどつか、総理談話打合）首相談話発表

十月二十六日 十時役員会四役、幹事長、処理方針、正午緊急役員会」

とあり、「十時」のくだりに横から線を引いて、「臨時閣議後任総理が決まるまで政務に停滞を来たさない。事態の收拾に一致協力する」と記されている。

また、「処理方針」と書いてある横には、「話し合いで後任総裁をきめる 話し合いは川島、三木が主導的役割りを果す 当分現体制でいく」と書かれ、川島の名前の前に、あとから「河野」の二文字が挿入されたり、×印で消されたりしている。「機関中心主義で役員会、総務会、両院顧問会、相談役会の議を経て、最終的に議員総会でしめくくる」と書いてあったり、の横に二重丸で「一任」と記されてあったりするのは、多分「池田首相一任」を意味しているものである。

決意表明の要旨は、入院以来、鋭意治療に努めているが、今日まで、一応順調に行っており。しかし、激務に耐え得るまでには尚五力月の期間がかかる、一方、国際情勢は目まぐるしい転換をみているし、内には臨時国会、予算編成、通常国会を控え、このような健康状態では政務を見ることは許されない、ついでには、この際、自分が辞職して後任の総裁を選び、新党首の下で挙党一致して内外の時局に雄渾に対処してもらいたい、自分の辞意を諒とせられ、副総裁、幹事長が中心となって、新党首選任に特段の御苦勞をお願いしたい、できれば新党首は話し合いで選び、かつ党及び政府の現体制の改編は極力これを避け、事態の穏健、円満、迅速な処理が望ましい となっている。

二十五日、実際に発表された首相談話では、のくだりが盛られていないが、これは党内的な手順に關するもので、池田首相の申送りの要請の色合いが濃いために見送られたからである。結局、談話の最終的な形は、「私は入院以来、一カ月余りを経たが、医師はなおしばらくの療養を求めています。私は首相の地位を辞任することを決意し」から始まり、「足らざるところの多かつた私に支援と鞭撻を惜しまなかつた国民各位に感謝の意を表します」に終わるものになった。

こうして昭和三十五年七月に安保騒動後の政局收拾の中で発足した池田政権は、昭和三十九年十月、事实上、その幕を閉じることとなった。

この四年三月月にわたつた池田政治が戦後史の中で果たした役割は何であつたか。言うまでもなく、その最も大きなものは、安保騒動で荒れ果てた人心を、所得倍増政策を掲げることによつて急速に鎮静させ、国民のエネルギーを吸いあげて、今日の日本の繁栄の基礎を築いたことにあるであらう。それはより長期的に見ると、戦後史のなかでの反米ナシヨナリズムのカタルシスを経て、国民が自らの手で新しい目標の設定を行ったことにあると言つてもよいであらう。所得倍増政策以後の実質経済成長率は、昭和三十七年度こそ五・七%と予想に達しなかつたが、三十六年度一四・四%、三十八年度には一二・九%と大幅に計画値を上回り、十一年計画は七年間で達成された。この成長ぶりは、当初は所得倍増計画に疑念を抱いていた国民を大いに勇気づけ、自分たちの生活向上のために惜しみない努力を行う国民資質を開発し、これを大きく展開させた。これによつて日本は、国際社会に動かすべからざる地歩を獲得した。

経済のこうした飛躍的な発展は一人の政治家、もしくは一つの政策によつてのみもたらされたものではない。とりわけ忘れてならないのは、戦後、長老財界人の追放によつて登場してきた新しい経営者層の活躍である。彼らは、池田内閣出現までに十年余の経験を経て、円熟の時期にさしかかつていた。池田を中心とし

た政治家・官僚群とこの経営者群は共通の世代経験をなかちとして、緊密に結びあい、折から世界に渦巻いていた技術革新の波を、旧套に固執することなく進んでつかみとつたのである。国民は、理想を現実化するダイナミズムに強く魅きつけられ、野党を中心とした諸勢力の称えるひからびた観念論から、次第に離反して行った。

政、官、財界、そして労働界をも結集したいわゆる日本型経営が広く定着したのもこの頃であった。それは、地縁や血縁による結びつきを離脱しつつあつた国民に与えられた新たなコミュニケーションであり、だからこそ、人々にとって求心力を持ちえたのであつた。

だが、急激な変化にはさまざまな副作用が伴うのは当然である。とりわけ、経済的繁栄優位の世相の中で産業や人口の都市集中化、それによつてもたらされた核家族化は、それまでの国民の価値観を大きく変化させ、これに伴う疎外化現象が社会のあちこちに見られるようになった。

池田は、経済成長が所得倍増政策によつて達成されたのと同じように、これらの問題が何らかの政策によつて解決さるべきものと考えたのであろう。彼は、人づくり政策を三選のスローガンとし、そのための膨大な審議会を発足させた。だが、池田自身によつて、「人づくり」がどのようなものであるべきかについてのビジョンは、所得倍増を打ち出したときほどの明確なものがなく、人々の強い関心を惹きつけることもできなかった。

池田首相の引退発表によつて、政局は、後継総裁選の渦の中に突入することになった。当時、有力候補と党内外で認められていたのは、佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎の三人である。この頃の状態では、池田が後継者を決めぬまま政権を投げ出してしまつと、党内は勢力を三分して三カ月前の総裁公選を上回る大混乱におちいる可能性が強かつた。

池田は、大平メモにもとづき昭和三十九年十月二十五日に退陣の意思表示をしたが、そのさい、川島副総裁、三木幹事長に対し、「一日も速やかに、かつ話し合いによって円満に後継首班を選考してほしい」と要請した。これに対し三木幹事長は「イギリス保守党の最近の政権交代　つまり病気のため辞職したマクミランからヒュームへの例　にならって、総裁たる池田さんが指名して決めるのがよい」と答え、川島副総裁もこれに賛同して、川島・三木調整工作　池田首相による後継指名、という方向がかたまつた。

こうして、十月二十五日からゴールの翌月九日まで、一週間にわたる緊張の連続した日々が始まつた。大平は、次のように記している。

「主役は川島正次郎・三木武夫の両氏であつた。私の仕事は、池田さんと川島・三木両氏との間の連絡接着のことであつた。……この工作があくまで……執行部の手によつて、しかもその手によつてのみ行われることを保証すること……が、党の統一を守り、政治に対する信念に應える道である……もし、そのことに失敗すれば、がんセンターに在る病首相みずからが工作の矢面に立たなければならなくなり、それは彼の生命までも奪つてであらうことをおそれた……」。

有力候補の佐藤、河野、藤山の三陣営はそれぞれ「われこそは最有力で、池田首相は必ず自分を指名するに違いない」と主張して名乗りをあげ、二十六日以降、調整役の川島・三木および池田主流派に対して、活発な働きかけを開始した。

三陣営それぞれの主張の根拠は、おおむね次のようである。

まず、佐藤陣営は、池田首相との共通の「恩師」である吉田元首相の意向が大きく影響することを期待していた。また五高以来の池田との個人的なつながりも無視できなかった。それに、何といつても三カ月前の総裁公選で、第二位として池田に迫つたという実績があつた。財界の多くも、それらを認めて佐藤を強く支持していた。

河野陣営は、池田政権の後半は全面的に協力し、池田三選にさいしても、大いに貢献していたし、池田自身、それを高く評価し、感謝の意向を表明していた。調整役の川島・三木がともに党人であることも、河野に幸いすると見られた。とくに川島は佐藤を好まず、河野に好意を抱いていた。

藤山陣営は、これまで、池田政権を全面的に協力してきたわけではないが、総裁公選以降の池田対佐藤の対立は根深く、また河野対佐藤の対立も深刻で、いわば漁夫の利を占める可能性に賭けることができた。

そのうちに、こうした三陣営の思惑とは別に、いわゆる総裁候補を持たぬ中間派 川島、三木、旧大野、池田の四派 が結束して、三候補の中から誰かを支持してはどうか、という動きが出はじめた。池田派内 部は、一時は、前尾らが藤山政権を真剣に検討したり、反佐藤的言動を行うものも出たりして、かなりの動揺を示した。

佐藤陣営からはさまざまなパイプを通じて、池田とその周辺、川島・三木両調整役に対する働きかけが行われた。『恩師』吉田元首相は大磯からしばしば上京して、池田派幹部に対してはもとより、両調整役に対しても「佐藤後継」をうながしたし、池田、佐藤の五高以来の友人たちも両者の間を往復した。両者と親しい多くの財界人も『池田から佐藤への円満な政権交代こそが保守安定政権の継続』と主張した。

興味深いのは、佐藤派の幹部ながら大平とは長年の盟友である田中角栄が、直接、首相の病室に乗り込んで話し合いを行い、大平に対して繰り返し「佐藤後継」を実現するよう働きかけたことである。田中は、池田ががんセンターに入院して間もない日曜日、池田の病室を訪れた。

「(池田さんは)私のがんセンターの病室に着くと、ちょっと前に河野一郎君が見舞ってくれて、今帰ったよ」とポツリと一言、言っただけの顔をじつと見つめられた……。後任は誰にするんだ」とまた一言ポツリ。私は池田総理の目を直視しながら、それは佐藤栄作だ」と一言、明確に言った。

……池田総理も私の目をじつと見ながら、ただ一言「うん」と言っただけで横になられた。……(私は)「このこ

とは大平君にだけは伝えておいて下さい」と一言述べて席を立つた。

大平自身も田中からの働きかけについて次のように述べている。

「田中君から佐藤さんの擁立のお話、強い要請があったことは事実です。それで私は『こういう問題はちやんとしておいてくれ。へたな動きはせんでくれ。天下、おさまるところへ、おさめていかんやいかんので、佐藤派が佐藤を擁立したいという気持ちはわかるけど、乞い願わくは派手な動きは慎んでくれ』と田中君にお願いしたんです……（田中君も）わかったということ、その後、私の見るかぎり佐藤派の動きは非常に自重していたと思う」。

大平としては、多数派工作などをやって党内に混乱をまき起こすことがなければ、大勢は落ちつくところ、に落ちつく、つまり円滑な幕引きができて、一任が取りつけられれば、佐藤が指名されると考えていたのがある。

一方、佐藤陣営と対立していた河野、藤山両陣営の動きは、佐藤陣営とは対照的に表面的には極めて活発であった。池田周辺から流れてくる佐藤指名有力の情報に河野と藤山は急速に接近し、十一月四日には、『河野・藤山盟約書』なるものができて、いずれが総裁に選出されても、協力しあう旨が取り決められた。

藤山が強気になった契機は、池田から「あのことは君もしっかり考えてやってもらいたい」と言われて手を握られたからでもあるが、何よりも池田首相の盟友の前尾前幹事長が藤山支持の意向を見せたからである。前尾は、藤山の『回想録』の編集記者のインタビューに答えて、次のように語っている。

「党内は佐藤でも河野でも分裂する危険があった。池田首相が病院に三木幹事長、大平副幹事長を呼んで、『藤山ということも考えてくれ』と話した。それは私の考えでもあった。藤山さんをたてて、私たちが全面的に押していかなければいかんと考えていた。河野さんは憎まれ役的なのがあるし、財界にもあまり評

判がよくない。藤山一本化工作はそう具体的なものではなかったが、空気として河野があくまでやるというのなら、河野派以外の人は河野より藤山の方が安心だと考えたのではないか」。

川島・三木調整工作の進行過程で、佐藤指名が実現するよう、同派に対して強く自重を求めていた裏の演出家である大平副幹事長にとって、河野・藤山連携の動きが具体化することは、全くの計算外であつたらしい。すなわち、池田派内部では、前尾と大平の二筋の流れが平行して進んでいたのである。

大平は、ただちに前尾前幹事長のもとを訪れ、「池田さんが川島・三木執行部に（調整を）頼んだのだから、池田派はあくまで二両所の調整を静かに待っているという態度で終始してもらいたい。したがって一切の動きをやめてください」と要請した。同時に、大平は、河野派の事務所をも訪問して、園田直、重政誠之ら同派幹部に対し、「河野、佐藤の二つの勢力が一つの安定した組合せになつた上に日本の政治はある。楕円形の二つの中心がちゃんとしていることが大事だ。聞くところによると、あなたの方の方は藤山さんとの話し合いで中心の座をおりるのおりないのというのはいかがなものか、少し無邪気すぎるのじゃないか」と連携の動きをいましめている。大平からみれば、河野・藤山連携工作は一種の多数派工作であり、佐藤陣営の多数派工作をいましめるのと同様、調整工作上、好ましい動きではない、と判断していたのであろう。

この調整工作の間、がんセンターの池田首相の病室に自由に入入りできたのは、政府側から鈴木善幸官房長官、党側から大平副幹事長の二人だった。大平は毎日、二、三時間は病室にあって、首相の四方山話の相手をした。

「私は毎日、まず総理の顔を見て、体の様子や精神的な安定があるかどうか、だれが訪ねて来たか、だれから電話があつたか、どういう状況で総理がいるかという点をいちいち見た。それから川島・三木両調整役の動きを報告した。だから私は非常に客観的な立場に立っていた。従つて池田さんと私の間においては、固有名詞は全然出ていません。このことは神に誓つていえます」。

大平は後継候補としての特定の固有名詞がうんぬんされたことはなかったとしているが、自重を求められながらも気をもんでいた佐藤陣営の田中角栄は、再三にわたり大平に対してアプローチを行った。

田中の回想によれば状況はこうである。「溜池の佐藤事務所に行く」と佐藤さんが一人で待っていた。扉は閉め切られており、佐藤さんの顔が相当硬い表情に見えた。「間違いないだろうネ」と一言。「間違うはずはない」と私は答えた。「大平君に念を押してくれ」と言う声に私は卓上の受話器をとって栄家に電話して、そこにいる筈の大平君を呼んで貰った。「失礼なことだが、佐藤さんが今、君に変わったことはいないか電話で念を押してくれと言われてね」と言つ私に、電話口の声は明確に「変わったことはまったくない」と答えた。私は、佐藤さんに「あなたが直接、電話口に出ますか」と念を押したところ「結構だ」と言いながら窓際の方へ歩いていったので、私は「失礼した。いずれ」と言つて受話器を置いた」。

川島・三木両調整役は、船田中衆議院議長、重宗雄三参議院議長を皮切りに、党長老、党内各機関の正副会長、当選一、二回の若手議員の意見を聞いたほか、大詰めには後継候補の佐藤、河野、藤山の三人と個別会談を開くなど積極的な動きをみせた。ほとんどの長老は、両調整役の訪問に対し「総裁一任」と答えたが、石橋元首相だけは「佐藤君が適当」と答えて注目された。

ゴールの十一月九日が刻々近づいた。前日の八日夜、両調整役は候補の三人をパレスホテルに招き、「われわれ二人に任せてほしい。後継総裁が誰に決まっても拳党体制で臨んでほしい」との確認をとりつけた。

その頃病室では、大平が池田首相に「あしたはいよいよ指名の日ですね。明朝、川島さんと三木さんとわれわれ二人（大平、鈴木）がここに参ります。「指名をいただかないといけません」と話していた。

大平が川島・三木両調整役はおそらくこういう報告をするだろうと言うと、池田首相は「それは君、一本化されていないじゃないか。困るね。オレは一本化してこいと頼んだのだ」と言う。そこで大平は「いえ、立派に一本化されていますよ。最後に総裁にお決めいただく、ということにちゃんと締めくくりがついてい

るじゃありませんか、これで一致しているんだから立派に一本化されています。ご心配ありません」と言つて、病室を出た。その夜、大平は自ら筆をとつて、翌朝、池田が書き込む固有名詞だけをあげた文章をしたためた。

指名当日の十一月九日、午前七時に川島・三木両調整役が病室に入った。大平副幹事長と鈴木官房長官が同席した病室で、両調整役は池田首相に調整工作の経過を簡潔に報告した。川島と三木はいずれも大勢が佐藤支持であることを述べたあと、「総裁のご指名を待ちます」としめくくつた。池田は「河野君には気の毒だが、佐藤君が後継者としては妥当だ」と語り、大平の用意した一文に太い字で「佐藤栄作」と書き入れた。午前七時二十分すぎである。

佐藤新総裁を決める両院議員総会の午前十時の開会に間にあつた川島、三木、大平、鈴木の四人は九時に病院を出ることとし、それまでの間、池田首相を囲みながら政治抜きで雑談に時間をつぶした。この時、大平副幹事長が最も心配したのは、指名されなかつた河野、藤山両陣営が、両院議員総会と首班指名のため午後一時からの衆議院本会議でどのような反応を示すかであったが、十時前に党本部の玄関で出会つた河野派幹部の森清は、大平の顔を見るなり、「いやあ、負けました。快く協力しますよ。われわれ全員、本会議に出て首班指名には投票しますよ」と話しかけ、大平をホッとさせた。

本会議で河野が議席に坐ると、大平はその前にまわつて「どうもご心労をかけました」と頭を下げた。河野は「いやあ大平君、結構だよ。きょうは河野派は全部出てきているからね。みんな揃つて『佐藤栄作』と書くから、君、安心せい」と答えた。

佐藤が無事、両院で首班に指名されたあと、大平はがんセンターの病室に戻つた。前首相となつた池田はテレビですべてを承知していたが、大平はこう話しかけた。

「あなたの政権の閉会式をどこおりにくすませたということで、お喜び申し上げます。きょうのハイライトは河野さんでした。河野さんならびに河野派がきょう、こういう措置に出ていなかったなら、この閉会式はとても血腥いものになったかもしれません。われわれが感謝しなければならないのは、河野さんと河野派に対してではないでしょうか。政治というものは、政権をとることもいいかもしませんが、きょうの河野さんのふるまいは、大変な重みを持ったんじゃないでしょうか」。

池田は涙ぐんで聞いていたが、やがて大平が「十一月九日という日は、あなたにとっても、私にとっても生涯における最良の日ですね」と言つと、だまっつてうなずいた。

大平は『春風秋雨』には、「十月二十五日より十一月九日に至るまでの二週間は、熱い湯桶に入っているように、永い緊張した歴史的時間であつた」と記し、また、のちに著した『私の履歴書』には、「それまでの二週間は、まことに長い長い二週間であつた。政権という得体の知れない妖怪が、その落ちつき先を求めて、平河町の自民党本部と築地のがんセンターとの間で彷徨していたのである」と書いている。

池田内閣の後を継いだ第一次佐藤内閣は、党執行部、内閣のメンバーはそのままの体制でスタートした。ただし池田、大平の水ももらさぬ関係を熟知していた鈴木官房長官だけは、総理と官房長官は一心同体でなければならぬ」として辞意を表明し、佐藤首相もこれを諒として、そのあとに橋本登美三郎を任命した。これとほぼ同様の理由から、大平も党の筆頭副幹事長のポストを佐藤派の瀬戸山三男に譲つて、無役の立場に回つた。